

# －カリオロジーの夢を追って－

新潟大学名誉教授 岩久正明

昭和57年11月3日着任の日、東亜国内航空機の窓からの雄大で美しい快晴の越後平野の一望、夕刻寄居浜から見た日本海の落日の刻一刻と変わる空と海の輝き、沖に浮かぶ佐渡のシルエット、いずれもなお記憶に鮮明です。

講座の仲間は、松野助教授、子田、大澤講師、岡本、日向、福島、鞍立、島津、榊原、若林教官、小林、上野、佐々木、富田医員、相場大学院生、巨技官、池津事務官、佐藤定雄、本間信策両非常勤講師、糟谷、鶴貝、真方、本間（鑑）、村山、小山、関井、池田、笹川、三上、長峯、細山非常勤医局員の皆さん方で、その他同門会から、田巻新太郎、神田 正一先生を始め多くのOBの方々の強力なバックアップがありました。

着任直前に、松野先生より送って戴いた科学研究費の申請用紙が、締め切りに間に合って、幸運にも新年度の科研費の交付を受け、研究活動を順調にスタートができたのは、先生のご配慮のおかげです。

新年度、講座を揺るがず激震が起きました。当時、歯周病の重要性がクローズアップされ始め、本学でも歯周病学を単独講座にするために、歯内療法学の担当を2から1に移す案が教授会で検討され、講座に打診されました。もちろん、当時の状況では教育時間数やスタッフ数などで極めてアンバランスが起こり、第一講座に異常な負担過重になることは明らかで、教授会でもその点を重視し、今後速やかに人事・時間数配分の改善努力をすとの確約がありました。

講座での長い、熱い議論が続きました。特記すべきは、その内容は、人的、時間的負担過重の問題より、むしろ将来に向けての理想的な講座像に焦点が絞られ、白熱した議論を聞きながら「何と素晴らしい仲間恵まれたか」の感激で胸が熱くなりました。

「う蝕への工学的アプローチから生物学的アプローチへ、治療から予防へ、個人から社会へ、歯科医学・医療研究は自然科学・社会科学・人文科学の総合的分野から」等々が将来への目標として集約一致し、教授会の意向を受け入れることが決意されました。

私は、1967～8年の文部省在外研究員生活を通じて、「北欧の戦後の歴史的必然性から生まれたカリオロジーの思想」に強烈に感染して帰国し、わが国でも今後速やかに歯学研究・教育・臨床の体系再編の必要性を痛感し、以来その希望を持ち続けておりました。

講座の決定は、教育・研究・臨床・社会的Needsへの積極的対応など全て、「修復学」から「カリオロジー」への発想の転換に着手する第一歩であり、素晴らしい選択と考えられました。ほぼ15年にわたって抱いてきた私の熱い思いを新潟の地で熱い仲間と共にスタートすることができたのは、まさに私の人生の最大の転機であり幸運であったと思っています。しかし、その後長きにわたって講座の仲間にならせた負担は多大なものであったと、申し訳なさと感謝の念を忘れたことはありません。

幸いにして、講座にはいろいろな分野の一騎当千の仲間がおり、直ちにプランニングに取り組みました。当時、文部省、厚生省、通産省、日本歯科医師会などの多くの仕事を前任地から引きずっていた関係で、私は留守がちでしたが、当初は松野助教授が私に代わって全てのマネージメントのコントロールをして下さり、ご退官後は子田助教授がその任に当たってくれました。そのため、私は、講座をカリオロジーの概念で統一してゆく研究・教育・臨床の企画の検討に時間を割くことができました。子田先生は、教室全体と共に、歯内療法の教育全般の中心となり、また、教室でのあ

らゆる分野へのコンピューター導入と講座内でのその教育・普及に尽力され、その機能性の向上の効果が教育・研究・臨床など講座のあらゆる分野の合理化・能率化に貢献しました。「教授はパソコンで作った原稿しか見ないよ」と云うような噂も流れました。心優しい(?) 私は、教室員の手書きの原稿の大幅の書き直しが気の毒で、ついついあまり手を加えられなかったのが、パソコン原稿になってからは、思い切って内容の再検討を論じあえるようになり、論文内容の一層の向上も図られました。私自身のパソコンの操作も、子田先生・岡本先生・池津さんらのご薫陶により徐々に向上し、後期高齢者になった今でも何とか講演のスライド作りや原稿書きなど曲がりなりにもパソコンが使えることに本当に感謝しています。

修復学については、大澤、岡本、福島先生らが教育・研究の中心的役割を果たしてくれました。

その後、年々多くの仲間が集まり、科学研究費も一人必ず一題以上申請するという申し合わせで、全スタッフが大変厳しい努力を強いられましたが、お陰様で毎年かなり高額な交付を受けて各種活動が活発になりました。

世界初のコンピューター・シミュレーション・システムの開発と教育への導入、SEM、TEM、XMAなど高度な機器を駆使した先駆的アイデアによる優れた研究、安藤、野々村先生らを先駆とする偏性嫌気性菌の研究、教室を上げての感染歯髄保存法・超音波歯内治療法の開発などが注目されます。また、竹中先生による共焦点レーザー顕微鏡を用いたプラークと細菌の関係の研究は、モナコのIADRで発表され、本分野の世界最初の研究として広く注目されました。吉羽夫妻を中心にした分子生物学、細胞生物学、免疫組織化学的研

究は、講座のみならず、再度の渡仏によりフランス・パスツール研究所との共同研究としても発表、注目されております。

また、福島先生を中心とする研究は「個人から社会へ」提起する自然科学・社会科学・人文科学の総合的分野からの啓発的取り組みで、現在の多くの研究の起点となるものであります。例えば、30年以上前から教育界で問題になりました学童のいじめや不登校の原因となる変色菌による被差別者への調査・対応治療法など研究が有ります。また、高齢者施設での細菌を指標とする調査研究・口腔指導は、誤嚥性肺炎の予防や自立の維持などのために重要な成果を発表し、現在の高齢者への対応の先駆けとなりました。本研究についての重要な細菌学的研究は、竹中先生が中心となって現在も進めております。

子田、岡本、福島、宇佐美、石崎先生らは、海外の研究生活でも優れた成果を上げておられます。また、材料学的研究では韓、重谷先生ほか多くの仲間の業績が有ります。これらの成果は、国際学会においても数多く発表され、講座の仲間と世界中を旅したことは素晴らしい思い出です。

紙面の都合上、全ての方々のお名前や業績を紹介できず申し訳ありません。

平成13年には、正式に「新潟大学大学院医歯学総合研究科口腔生命科学専攻口腔健康科学講座う蝕学分野」となり、晴れて日本で初めての「デパートメント・オブ・カリオロジー」を標ぼうする長年の私の夢が叶いました。

平成15年の定年退官まで足かけ21年にわたる新潟生活でお世話になりました多くの方々への感謝の気持ちで日々過ごしております。